
ヴェルベットの館

ヴァンパイア子爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルベットの館

【Nコード】

N3377E

【作者名】

ヴァンパイア子爵

【あらすじ】

館の住人たちは、首をかしげる。何故、自分たちは死なないんだろ。永遠を行きながら、永遠を生きていない存在。時に悲哀、時に滑稽なメロディーを奏でる、彼ら。来るべきハロウィンの夜、誰かの手によって扉は開かれる。——いらっしやいませ。我が主の館へ、ようこそ。

プロローグ：始まりの終焉

——時は十九世紀末。

西洋の一国に、ある没落貴族と、その取り巻きたちが棲む大きな邸^{やしき}があつた。

邸には、正門から入口まで奇麗に大理石が牽^ひかれ、周りには選^えりすぐりの薔薇が、建物を包みこむように咲いている。

ときおり、正装をした執事が、薔薇の手入れをしていた。

この邸の主は当時、とても親切で紳士的な人物として、多くの人に知られていた。

その名は、ヴェルベツト＝アブリコツト。

元々は子爵という爵位を背負い、舞踏会や仮装パーティなどで他の貴族を超越した、優雅な才色^{あじわ}を顕^{あらわ}していた。

彼は日溜まりの庭園でパーティを開き、濃厚な薔薇の香りを楽しみながら、使用人たちとでさえ談笑を交わしあう人物だった。

彼の周りには常に、邸の住人たちが付きつきりだった。

幸せな表情が傍^{そば}にあつた。

旦那さま、お食事はいかがですか。ご一緒に出掛けられませんか。誰もから、慕われている存在だった。

——一八九七年。

まもなく、十九世紀が終わりを迎える、その時まで。

「——さて、そろそろ閉めますか」

男は絨毯張りの廊下を歩きながら、ガラス越しに外を見た。夜明け前の薄暗い空間に、蠟燭の灯が、彼の影を描いている。

小さな光の粒が、ゆっくりと入り込んでくるのを、彼はいとおしそうに見つめた。夜明け前に、彼は館にある全てのカーテンを閉め、燭台に灯をともし役割を担っている。

「さ、早く片付けなくては」

男は持っていた燭台を床に置き、フランス窓のカーテンをそつと引いた。

|
T
o
b
e
n
e
x
t
d
o
o
r
.
.

第1の扉：パーティーへの招待

「……ロンド……」

男は、小さく洩らした。

暗幕に、光をいっさい遮断された部屋のなか。彼は膝を抱えこんで、じっと”見えるはずの何か”に目を凝らしていた。

今日も、来ない。

暗闇という空間に、僕はいつも独りぼっち。広くて狭い場所で、息をひそめて待っている。

……君は、まだかな。

黒の支配下にある空間に、ふと光が灯った。

「おはようございます、ネル先生」

彼に声をかけたのは、望む待ち人ではなく、館の執事だった。ネルと呼ばれた男は、少しばかりむっとして執事を睨む。

「何だ、君か。ノックもせずに」

刺々（とげとげ）しい雰囲気に着ひとつ動かさず、執事は持っていた燭台をテーブルに置いた。

闇に隠れていた家具や装飾が、ぼんやり浮かび上がる。

「邪魔しないでくれ」

ネルは、置かれた燭台を鬱陶しそうに見つめた。

それから、微かな光でさえ自分の世界を壊すのだ、とてもいうように、目を細める。

「お身体を壊しますよ。さあ、朝食の席へいらしてください」

執事は、膝を抱えこんでいるネルの前にしゃがみ、蠟燭に照らされた彼の顔を覗き込んだ。

「食事など、摂らなくても死にはしないよ」

ネルは少しばかり声を低くして、相変わらず迷惑そうにしている。

「確かに仰る通りですが、たまには旦那様にお顔をお見せになつては、いかがでしょうか？」

「ふん、やだね。僕はあんな訳のわからない奴を、主人だなんて認めてないよ」

その言葉に、執事は苦笑した。

貴方様だって、十分に訳のわからない方でいらっしやると思います。

それを口には出さず、執事は立ち上がった。白い上質の手袋を填めた手で、彼は置いた燭台を再び持つ。

座り込んでいるネルの顔が、蠟燭の灯りを免れ、少し翳^{かげ}りを帯びた。

「仕方ありませんね。気が向いたら、いらしてください」

苦笑混じりの呆れた声に、ネルは機嫌を損ねるようすもなく、
「気が向いたら、ね」

と、勝ち誇ったように答えた。

全くいつものパターンだ。

「では、失礼いたします」

そう残して執事は去り、僕は光のない闇のなかでまた、君を待ち続ける。

今日も、その繰り返しの筈だった。

「——と、本来なら失礼させていただくところですが。今日ばかりは、そういう訳にもいかなくなりました」

執事は口元に微笑を浮かべながら、穏やかに、やや低い声で言った。

いつもとは違う彼の雰囲気、ネルはぴくりと背筋を震わせる。

執事の声は、穏やかながらも、有無を言わせぬ圧迫感を感じさせた。

「な、なんだって言うんだ？」

虚勢を張ろうとして失敗したネルが、掠れた声を出す。

執事は微笑を崩さずに、彼を見下ろした。まるで東洋の幽霊じゃないか、とネルは思いつつ、蠟燭の灯に浮き上がった執事の顔から目を逸らす。

不気味な演出で微笑みながら、執事は愉快そうな口調で言った。

「何せ、今日はハロウィンパーティーですから」

「……………は？」

ザ・東洋・ゴーストもどき、もとい、執事は、燭台を誇らしげに掲げた。

『——紅い月が笑う宵闇には、
君への招待状が届くことだろう。
さあ、黒に身を包んで出掛けるがいい。』

僕はあの場所で待っている』

——ヴェルベット・アプリコット手記より

T o b e n e x t d o o r . . .

第2の扉：開かれた扉

大広間、というのだろうか。

薔薇やカボチャ、蝙蝠をモチーフにした黒い装飾の数々が、住人たちの心を躍らせる。

そこには、いかにも貴族らしい紳士や着飾った貴婦人、骨だけのような細身のシルクハット、包帯づくめの魔術師、実にさまざまな形相の者たちが集まっていた。

特別に用意されたのであろう、艶やかな漆黒のテーブル上には、七面鳥やスープ、キャンディ、ワインなどが豪勢に並べられていた。奥でパイプオルガンを奏でる男を、燭台が仄かに映しだしている。

「どうです、ネル先生」

燭台片手に執事は胸を張って、得意気に彼を見た。

ネルは、無理やり着替えさせられた舞踏会用の紳士服が気に入らないらしく、拗ね^すている様子だ。

「興味ないね。ハロウィンなんか」

そう言って、服に施された蝙蝠の装飾に手をやる。

「だいたい僕のポリシーは、薔薇なんだ。蝙蝠なんて、似合わないよ」

「おや、お気に召されませんか？」

そう気遣いながらも、執事の声は愉し^{たの}そうだった。彼の視線は、軽やかな舞踏に注がれている。

目の前に繰り広げられる優雅な輪舞^{ロンド}、即興的な演奏は、見るものを惹きつける何かがあった。

それは、彼らに漂う悲愴なのか、乱れることない繊細な動きなのか、華やかな装飾なのか、ネルにはよく分からなかった。

舞踏会なんて、——お遊びだ。

ネルはずっとそう思っていた。

「貴方様はまだ、舞踏会の意義をわかっていらっしやらないようですね」

ネルの心を見透かしたように、横から静かな声がする。

彼はぎよつとして、葬列に並ぶかのように沈んだ目をした執事を見た。しかし口元だけは、いつものように微笑んでいる。

不気味だ、と思った。

舞踏は休むことなく続いていき、輪舞曲から円舞曲へと自然に演奏が展開されていった。

ゆつたりとステップを踏む紳士たちを横目に、ネルは執事に向かって口を開いた。

「君は、何で僕を連れ出したんだ」

隣にいる執事の身体が、ぴくりとする。

「ハロウィンだの、パーティーだの言って部屋から連れ出したのは、他に理由があるんだろう？」

彼は最初から、この下らない催しものには何か裏があるに違いない、と踏んでいた。

執事の反応からして、それは確信に変わる。

しばらくの沈黙の後、執事はふっと笑みを浮かべて言った。

「……鋭いお方だ。舞踏に関しては、そうでもいらっしやらないのに」

「余計なお世話だ！」

間髪入れずにネルは言葉を挟む。

腰に手をあててご立腹の彼に、執事はやれやれと肩をすくめた。

「まあ、それならば話は早いですね。芳しいお知らせではないので、後にしようと思ったのですが……」

含んだ言い方をした後、急に執事は黙って歩きだした。

「お、おい！」

ネルは彼の背後を追うように、小走りについていった。途中で住人とぶつかりそうになり、頭を下げる。

そのときにはまだ謝る余裕もあつたから。

T o b e n e x t d o o r . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3377e/>

ヴェルベットの館

2011年1月28日08時48分発行